



お祝いのことば

名古屋大学 工学部長 丸勢 進

愛知電機工作所が技報を発刊されるという御計画をうかがった。終戦後の混乱期に、磁気測定に関する研究に携っていた私は、変圧器鉄心材料の問題点などの御教示を受けるために、当時の水筒先町の工場に時折参上していたこともあって、その後は会社の継続的な発展を陰ながら喜ばしくながめていたものである。技報の発刊は、会社の規模のこのような拡大と同様な、技術内容の充実と技術分野の拡張を示すものであって、衷心からお祝いを申しあげる次第である。この機会をかりて、企業の技報というものについての日頃の雑感を、若干述べさせていただきます。

若い頃、大学に閉じこもって基礎的な研究に従事していた私は、正直なところ、企業の技報の存在価値について些か疑念をもっていたが、昭和30年代になって欧州に滞在している間に、すっかり考えが改った。当時すでに欧州の社会一般には、日本の工業の発展に対する漠然とした不安があり、模造品を売る日本というような、誤解に基づく記事も度々新聞紙上にみられて、不愉快な思いをすることもあったが、実際に日常目につく日本の工業製品は、カメラとトランジスタラジオぐらいに過ぎず、近い将来に日本製自動車も欧州各国を走り廻る光景などは予想しえない時代であった。ところが、当時の日本人留学生の間で流行していた学費稼ぎは、日本企業の技報の翻訳だったのである。西独の工業界の知人等の言によると、製品の背後に存在する企業の技術内容だけでなく、日本工業の動向や指向している方向も、各社の技報によって最もよく知ることができるとのことであった。彼等は日本企業の技術開発や改良に対する努力も十分に理解していて、巷間の誤った日本観などは、勿論全くもっていなかった。やがて国際化時代を迎えるわが国は、製品だけで勝負という考えは通じなくなること、多方面において発生することが予想される外国の誤解を解消する方策としては、われわれの真の姿を知って貰うしかないこと、またその為の努力は、面倒であっても、日本側である必要があることを、早急に認識しなければならないと思った次第である。三十年近い歳月を経て、昨今は一層その思いを強くしている。

昭和40年代になると、私共の研究の進め方も次第に変わってきた。すなわち、以前は購入した既製品の実験装置と、研究室手作りの機器によって実験を行っていたが、手作りが少なくなって、新しい機器の製作を企業に依頼することが多くなってきたのである。既製品の選択は、その評判や検査に頼ることができるが、依頼する企業の選択は容易でなく、関連分野における技術の水準や信頼度を判断する材料として、私共自身も企業の技報を大いに利用するようになったのである。

さてここ数年来、欧米諸国でもわが国でも、産学協力の重要性がさかんに提唱されている。これは、技術発展の速度と技術革新の頻度の増大に対処するためには、多くの人々の知識の集積、とくに異なる技術分野の人々の協力が必要になってきたためである。最近、産学協力推進の対策会議に列席する機会が多いが、会議の審議過程で、企業からの多くの参加者の意見は、産学以上に産産協力も重要であるのに、産業界内での情報交換が意外に乏しいということである。近年多くの企業が次々と技術分野を拡張するために、会社の名称や伝統的な製品からは想像できない業務も取扱うようになり、長年同地域に存在している企業間においても、他社の手掛けている仕事の種類すら知らず、折角の協力の機会を逸するという事実があるようである。これは緊急な対策を必要とする課題である。企業の技報は解決の強力な方法であり、この意味において、今までになくその重要性が高まっていると言えよう。

私は、この時宜をえた技報発刊が、愛知電機工作所のためのみでなく、地域および日本の工業界への大きい貢献を期待しているものである。